

## 松尾 潔さんに聞く



# 音楽と政治・社会に 接続の意識を

「人権侵害」を見て見ぬふりはできない

菅間正道（自由の森学園高校・校長）  
聞き手

**菅間** 本誌巻頭インタビューで音楽関係の方にお話を伺うのは、ソウル・フラワー・ユニオンの中川敬さん（二〇一五年八六号）、加藤登紀子さん（二〇二三年一五号）に続いてお三方目になります。いずれも音楽と社会・政治の境界線を超える／ぼかす活動を長年されておられますが、松尾さんも、音楽プロデューサーという肩書きに収まらない、広範囲・多岐にわたる社会的活動をされています。

まずお伺いしたいのは、プロデューサー業についてです。とりわけ音楽プロデューサーというと、ビートルズ

にジョージ・マーティン、マイケル・ジャクソンにクインシー・ジョーンズなどが思い浮かびます。クインシーには、松尾さんはインタビューされているんですよね。

『週刊文春』連載の阿川佐和子さんのインタビュー「この人に会いたい」（二〇二四年五月二三日号）でも、阿川さんは僕と同じように「音楽プロデューサーって具体的に何をするんですか？」と冒頭で松尾さんに質問していますが、あまり深堀りはされておらず、流れてしまっています。

まったくような感じなので、まずはこの問い合わせから入りたいと思います。

**松尾** 確かに、阿川さんの時も最初の質問はそうでしたね。一口にプロデューサーと言つても本当に色々で、僕がお話しできるのは、あくまで音楽プロデュースの話です。この類の質問を受けることはよくあって、どう答えたらしいのかと試行錯誤を重ねてきていますが、現時点できれいに例えにならないのではないか、という仕事がレストランの総料理長なんですね。『総』がついてもつかなくてもいいんですけど、料理長の場合、小さなお店だったら全て一人でこなすこともあるでしょう。音楽プロデュースだってローバジェット（低予算）の時はそういうこともあります。

僕はメジャーなお仕事が多いので、さすがに一人でやるということはないですが、それはともかくなぜ料理長なのか。こういう料理を作りたいというゴールがあるため、そのために食材、職人をどう配置するか、プロセスをどうするかを考える。場合によつては、就任したタイミングでキッチンのあり方をえてみたりする。それって、スタジオの機材を変えること似ています。その工程が複雑だらうとシンプルだらうと一貫してあるのは最

まつお きよし  
1968年、福岡市生まれ  
音楽プロデューサー／作家  
少年時代から米黒人音楽に心酔し、早稲田大学在学中にR&Bやヒップホップなどを取材対象として音楽ライター活動を始める。90年代半ばから音楽制作に携わりSPEED、MISIA、宇多田ヒカルのデビューにブレーンとして参加  
その後、プロデューサー、ソングライターとして平井堅、CHEMISTRY、東方神起JUJUなどを手がける。提供的した楽曲の累計セールスは3000万枚を超す  
EXILE「Ti Amo」（作詞・作曲）で日本レコード大賞  
天童よしみ「帰郷」で日本作詞大賞を受賞  
著書に『松尾潔のメロウな日々』、『松尾潔のメロウな季節』『永遠の仮眠』、『おれの歌を止めるな ジャニーズ問題とエンターテインメントの未来』、『松尾潔のメロウなライナーノーツ』など